明久がハーレムで頑張りますっ！

近衛龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明久がハーレムで頑張りますっ！

【Ｎコード】
Ｎ４８５１Ｘ

【作者名】
近衛龍一

【あらすじ】
試召戦争に始まり、清涼祭、強化合宿、再び試召戦争。そして、肝試し大会、海水浴、夏祭り、体育大会、また試召戦争。
そんな充実した生活を送っている明久の物語。
タイトルから分かる通り、明久ハーレムです。

プロローグ

「ほっほっほっほっ！」

僕、吉井明久は今日もいつもの坂道を走っている。

トレーニングとかじゃないよ？

時間ギリギリで登校してるだけ。

「おはよう吉井。今日もギリギリだな」

そんなドスの効いた声で話しかけてくるのは鉄人、通称西村先生。

「逆だぞ吉井。俺は西村。そして通称鉄人だ。ってそれも違う！俺は鉄人なんかではない！」

珍しい。鉄人がノリツッコミするなんて。

というかなんで僕の考えてることが分かったんだろ……？

「ほら、バカなこと考えてないでさっさと教室に行け。遅刻するぞ」

「へ〜い」

こうして、僕の変わらぬ日常はスタートしていくんだ。

プロローグ（後書き）

感想お待ちしております！

設定

明久ハーレム物語

学力はＦクラスレベルのまま。
雄二、康太とは親友。
喧嘩も雄二並。そしてフラグ魔。
尚且つ鈍感さも健在。
秀吉は女。だがジイ言葉は変わらない。
明久のことが好きなのは姫路、美波、秀吉、優子、愛子が主要。一応久保も。

物語は体育祭の後の試召戦争が終わったあたりから。

オリキャラの登場はないものの、話は全てオリ話（の予定）

・他の細かい設定

ＦＦＦ団は活動中。

玲は善人。寧ろ明久に彼女を作ってほしいくらい。

雄二×翔子は変わらず。
関係は良好。

美春が美波が好きなのも変わらない。

姫路の料理は未だ殺人級。

美波も未だツンデレ。

設定（後書き）

感想お待ちしております！

いつもの朝

ガラッ

「おはよう皆っ！」

僕は勢いよく教室の扉（ボロボロの障子）を開ける。

うん、いつもの通り、腐った畳の匂いがするよ……

そして、そんな僕の挨拶に一番に反応したのは……

「明久っ！おはようなのじゃ！」

木下秀吉だった。

秀吉は僕の方に走ってきて、僕に抱きついた。

「ああっ！木下！あんた何してるのよっ！」

「そうですよ！朝からそういうことはよくないと思います！」

続いて美波に姫路さん。

「別にいいのじゃ。わしは去年から明久と仲がよいからこれくらいのことはいいのじゃ。のう、明久よ」

「え？ああ、でも少し控えてほしいかな……」

「むぅ……お主はわしのことがきらいなのかの？」

「そういうわけじゃないんだけどさ……」

寧ろ秀吉は可愛いからいいんだけど……

『これより異端者吉井明久を異端審問会にかける！皆吉井を捕らえろ！』

『『『はっ！異端者には死の鉄槌を！』』』

「ああいうバカがいるからさ……」

クラスメイトであり、学園でも折り紙付きのバカ共が僕に襲いかかってくる。

「ごめん雄二、ムッツリーニ、協力してくれない？」

僕は教室の隅で話していた親友２人に声をかける。

「ったく、毎朝じゃねえかよ……仕方ねぇな……」

「……貸し１」

「分かったよ。今度ハンバーガー奢るから……」

「よっしゃ。いっちょ行きますか」

心強い親友２人と共に襲ってきたバカ達（約４０人）を返り討ちにする。

「秀吉も少しは控えろよ。毎朝大変なんだぞ？」

「よいではないか。お主らは強いのじゃし」

「あはは……」

え？何で秀吉が抱き付いてくるのかって？

僕もよく分からないけど、甘えたがりなんじゃないの？

肝試しのときのオカルト召喚獣もネコの妖怪だったし。

「そんじゃ、今日の帰りにでも奢ってもらうとするか」

「……賛成」

「はいはい。分かったよ」

実際、あのバカ達を止めるのにハンバーガー一個ずつは安い。

これも友情価格というものだろう。

「……明久、これ、いつもの」

「あ、ありがとムッツリーニ」

ムッツリーニから受け取ったのは『ＴＨＥ・文月学園・裏新聞』。

不定期でムッツリーニが経営しているムッツリ商会で販売している新聞だ。

ムッツリーニが作っているだけあって、お宝写真を載せてたり、面白い情報が書いてあったりする。

まあ大半はお宝写真目当ての人が多いんだけど。

そしてこの新聞のすごいところは発売部数だ。

なんと毎回２０００部は軽く突破している（因みに全校生徒は約９００人くらいだよ）新聞だ。

僕はその新聞を開き、目を通す。

ほうほう……『根元、完全に女装趣味に目覚める』ね。

……おえっ。

気持ち悪い……。

一気に読む気を無くした僕は新聞を閉じる。

そして、それと同時にこのクラスの担任でえる鉄人が入ってきた。

「よ～し、お前ら。全員揃っているな？本日の連絡事項は特になし。今日も一日、問題を起こさずに生活しろよ」

先生、間違ってますよ。

このクラスの場合は今日こそはです。

ってあれ？皆何時の間にか復活してる。

回復早っ……

「それでは、早いがこれにてＨＲを終了する」

そう言って、本当にすぐに退出する鉄人。

ま、このクラスに何を言っても無駄なんだろうけどね。

さて、今日も一日頑張りますか！

いつもの朝（後書き）

感想お待ちしております！

昼休み、逃走者明久

「こら吉井！待たんか！」

「待てと言われて待つ人なんていませんっ！」

只今廊下を疾走中〜

どうしてこうなったかって言うと……

☆☆☆

昼休み。

「吉井、昼休みだが、ちょっとこい。観察処分者の仕事がある」

「え～？嫌ですよ～」

「文句を言うな！さっさとこい！」

「ちぇ……」

鉄人に促され渋々と立ち上がる僕。

「むむっ……今日は一緒にお昼を食べる約束だったではないか……」

そして秀吉がムスッとして僕をジト目で見る。

「ごめんごめん。すぐに戻ってくるからさ」

「絶対じゃぞ？」

「うん」

そう、……すぐに、ね。

「ほら、早くこんか！」

「分かりましたよ」

しつこく呼ぶ鉄人の元へ行き、教室を出る。

そして、

「仕事は教官室でやるからな。こっちだ……って吉井！？逃げるんじゃない！」

全力で鉄人の向かう方向とは反対に走り出す。

仕事なんて嫌だからね♪

「こら吉井！待たんか！」

「待てと言われて待つ人なんていませんっ！」

そして冒頭に戻る。

後はこのまま逃げ切ってＦクラスに戻れば完璧……なはずだっんだけど……

『吉井め！またも木下と一緒に食事をしようとしたな！異端者として私刑にしてくれるわ！』

『殺っちゃうよ～！吉井をズタズタに殺っちゃうよ～』

『朝の恨みも含めて成敗してくれるわっ！』

ＦＦＦ団（バカ達）まで鉄人と一緒に追いかけてきてしまった。

これで逃走が困難になる……

『待て～～～！！！！』

「くっ！流石は普段から（異端審問会で）鍛えてることだけはあるっ！」

ＦＦＦ団の能力値は高いから正直やっかいだ。

どうやって逃げようか……

逃走経路を考えながら曲がり角を曲がると、

「吉井君こっちこっち！」

「おわっ！？」

急に手を引っ張られて、空き教室に引きずられてしまった。

『何っ！？吉井が消えただと！？』

『いや待つんだ！きっとそこの空き教室にいるはず！』

外から聞こえるＦＦＦ団の声。

「吉井君はそこに隠れてて」

「う、うん」

ある人物に言われ、教卓の下に隠れこむ。

ガラッ！

「吉井！覚悟しろ！……ってあら……？」

「あれ？Ｆクラスの人たちじゃない。どうしたの？」

「す、すみません。吉井がこちらに逃げ込んできませんでしたか？」

「吉井君？見てないけど……」

「そ、そうですか……」

『おかしいな……』と言いながら退出していくＦＦＦ団。

どうやら上手くいったらしい。

「出てきていいよ。吉井君」

教卓から出て、助けてくれた人物にお礼を言う。

「ありがとね、工藤さん」

「ううん。吉井君が追いかけられてたからボクができることをしたまでだよ」

工藤愛子さん。

Aクラスの生徒で、ボーイッシュで魅力のある女の子だ。

「おかげで助かったよ。今度、何かお礼するね。じゃあ」

そう告げて、Fクラスに戻ろうとしたのだが、

「あ、ちょっと待って！」

何故か工藤さんに呼び止められた。

「？どうしたの？」

「ああ、えっと……そ、そうだ！ここってFクラスよりAクラスの方が近いじゃん？だから、また今の人たちに見つからないように、とりあえずAクラスに避難したら？」

「え？で、でもそれじゃあAクラスの人に迷惑じゃない？」

「ぜ、全然そんなことないよっ！むしろ歓迎すると思うケド？」

「そ、そうかな……？」

「そうだよ！せっかくだし、寄って行ってよ！お菓子もあるしさっ

！」

「え、ああ……うん……」

お菓子か……

確かにそれには惹かれるな……

「よしっ！じゃあ行こっ！」

「え？ああ！工藤さん！？」

適当に誤魔化しただけの返事だったのに、工藤さんはそれを肯定と受け取ったらしく、僕の腕に抱き付いて引っ張る。

うっ……微かに柔らかい感触が……っ！

「……今、とっても失礼なことを思われた気がするんだケド？」

「……気のせいじゃないかな？」

教訓、どこに行っても女子の勘は鋭い、っと。

そうだ！どうせAクラスに行くなら霧島さんもいるんだし、雄二も誘うか！

おまけ

「ううっ……明久が帰ってこんのじゃ……」

「あいつだって大変なんだろ」

「……さっきＦＦＦ団が明久を追いかけていた」

「明久も大変だな……」

ｐｉｐｉｐｉ

「おっ、明久からメールだ」

「なんじゃと！？」

「がっつくな、がっつくな。どれどれ？」

『ＦＲＯＭ明久：今、工藤さんとＡクラスに向かってるんだ。雄二もＡクラスに来たら？』

「「……」」

「ほぅ？明久はわしとの約束をすっぽかして、工藤なんぞとＡクラスにのぅ……？」

「さ、さて！飯も食ったし俺は昼寝でもするかな！」

「……賛成」

「雄二、ムッツリーニよ。一緒にＡクラスについて来てはくれぬか？」

「い、いや、だから昼寝を……」

「ついてきてくれぬか？」

「「……はい」」

昼休み、逃走者明久（後書き）

感想お待ちしております！

後、自分でオリジナル小説も書いていますのでよければそちらの方も読んでみてください！！

修羅場？そして鈍感

「吉井君はそこに座ってて」

「う、うん」

工藤さんに連れられてＡクラスにやって来た僕。

何故か雄二にメールを送った直後にもの凄い殺気を感じたのは気のせいだろう。

それにしても、やっぱりＡクラスの設備は凄いな……

腐った畳の匂いはしないし、今座っているソファーはフカフカで、机の脚も折れていない。

なんてことを思っていると、お弁当箱を持って工藤さんが戻ってきた。

「吉井君、まだお昼食べてないんだよね？」

「え？ああ、うん。まだ食べてないよ」

「よかった。じゃあ一緒にお昼食べない？」

「でも僕お弁当を教室に置きっぱなしだし……」

「だったらボクのお弁当を分けてあげるよ」

「そ、それは工藤さんに悪いよ！」

「いいんだってば。ボク、そんなに食べないし」

そういいながらお弁当箱を開ける工藤さん。

中には卵焼きやミニハンバーグなど、様々な種類のオカズが入っていた。

「吉井君はどれがいい？」

「え？ほ、ほんとにいいの？」

「いいよ。吉井君が好きなの食べなよ」

「ぼ、僕はどれでもいいけど……」

「う～ん……じゃあこれだね」

工藤さんはミニハンバーグを箸で掴む。

あれ？でも僕はどうやって食べるんだろ？

「はい、あ～ん」

「ええっ！？く、工藤さん！？」

「？どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ！そういうのはカップルなんかがするんだよ！？」

「ボクはあんまりそういうこと気にしないケド？（それにボクはカップルになってもいいしね♪）」

「僕が気にするんだけど……」

工藤さんがそういうことにおおっぴらだということは知っていたけど、ここまでとは……

「それともボクなんかじゃ、いや……？」

うっ……！

上目遣いだとっ！？

か、勝てないっ……！

「わ、分かったよ。それじゃあ、そうさせてもらいます……」

「じゃあ改めて、はい、あ～ん」

「あ、あ～ん」

「どう？美味しい？」

「う、うん。美味しいよ」

美味しい。確かに美味しいんだ。

でも……

「吉井のやつ！工藤さんに『はい、あ～ん』だと！？羨ましすぎる！」

「殺したい！殺したいぞ！」

Aクラスの男子（約一名除く）に睨まれてるような気がするんだけど……

「それじゃこれも、はい、あ～ん」

続けざまに卵焼きを僕の口に近づける。

マジですか……？

で、でも僕がご馳走になっている訳だから断れないわけで……

「あ、あ～ん」

再び工藤さんに食べさせてもらう。

そして事件は起こった。

ガラッ！

勢いよく開かれた扉。

そこに立っていたのは……

「明久……？お主、何をしておるのじゃ？」

後ろに雄二とムッツリーニ（そして何故か阿修羅像まで）を連れてきている秀吉。

現在の僕の状況は工藤さんの『はい、あ～ん』の途中。

理由は分からないけど、たったいま、僕に死亡フラグが立ったような気がする。

「わしとの約束をすっぽかして、工藤に『はい、あ～ん』じゃと？明久、覚悟はできておろうな？」

「こ、ごめん秀吉！ち、違うんだよ！ＦＦＦ団に追いかけられてたところを工藤さんに助けてもらって、その、成り行きで！」

「どうすれば『はい、あ～ん』をしてもらうような成り行きになるのじゃ？」

ヤバい……

今の秀吉に勝てる気がしない……！

た、助けは……？

ダメだ！雄二とムッツリーニも脅えてる！

くそっ……！万事休すか……っ！

ガックリと肩を落とし、これから捕まる犯罪者のような趣でゆっくりと歩く。

すると、

ギュッ

「この埋め合わせは必ずしてもらうのじゃ」

「へい……？」

秀吉が僕に抱きつきてそう言った。

「う、埋め合わせ……？」

「そうなのじゃ。今度の日曜日に、わしと買い物に行ってもらうのじゃ」

「きょ、拒否権は……？」

「あるわけないのじゃ」

「で、ですよね……」

「秀吉ズル～い！ボクも一緒に行きたいよ！」

く、工藤さん？貴方は何をおっしゃっているんですか？

「だ、ダメじゃ工藤！お主は充分いい思いをしたではないかっ！」

「それとこれとは別だよ。ね、いいでしょ、吉井君。さっき助けたお礼、それにしてよっ」

「うっ……わ、分かったよ……」

「明久！」

「し、仕方ないよ。助けてもらったのは事実だし……」

「むぅ……明久は全然分かっておらんのじゃ……」

さて、一応修羅場（？）を抜けることは出来たから安心安心。

でも……

「ねえ雄二、ムッツリーニ。なんであの二人は僕を買い物に誘ったの？彼氏のプレゼントでも買いに行くのかな？」

「自分で考えろ鈍感野郎」

「……ここまでくるとただのバカとしか言いようがない」

「酷い罵倒をどうも……」

理由は分からないけど、ま、いっか。

修羅場？そして鈍感（後書き）

感想お待ちしております！

オリジナル小説の方も是非一度見てみてください！

昼寝でもしようかな

「ふぁ～……」

ヤバい……なんだか眠くなってきたよ……

「ん？なんだ明久。眠たくなってきたのか？」

僕が欠伸をしたことに気づいた雄二。

僕はもう一度欠伸をしながら頷く。

「昨日は姉さんが帰ってこなかったから夜遅くまでゲームしてたんだよね……」

「ったく、相変わらずだな明久は」

「じゃあ、僕は教室に戻って昼寝でもしてくるよ」

「俺も行くぞ。ここにくる前は昼寝をするつもりだったからな」

「あれ？霧島さんに会わなくていいの？」

「いいんだ。どうせ翔子とはよく会うしな。昼休みくらいどうってことないさ」

「……雄二、呼んだ？」

「おわっ！？な、なんだ翔子か。脅かすな」

突如雄二の隣に現れた霧島さん。

霧島さんほど神出鬼没という言葉が合う人はいないんじゃないかな？

「……雄二の声が聞こえたから職員室から急いで戻ってきた」

「速すぎたろ！？」

いやいや雄二。それよりも職員室にいても雄二の声が聞こえたっていう人外な地獄耳の方をつっこむべきだよ……

「……雄二はお昼寝？」

「まあな。そう気を落とすな。放課後はちゃんと迎えにくっからよ」

「……でも……。そうだ、お昼寝するならＡクラスで寝るといい」

そういって、教室にあるフカフカで寝心地の良さそうなソファーを

指す霧島さん。

「だ、だが……いいのか？」

「……構わない。これも雄二の為。吉井もお昼寝するなら使うといい」

「え？僕もいいの？」

「……もちろん。吉井にはいつもよくしてもらっている」

「どうするの雄二？」

「何故俺に聞く？」

「だって雄二がねないんだったら僕だけＡクラスでなんて無理だよ」

「そうだな……それじゃ、お言葉に甘えるとするか」

「……よかった。じゃあ私が膝枕してあげる」

「なんでそうなるんだよ……」

「……夫を膝枕するのは妻の役目」

「まだ夫じゃねぇ……」

でもそれっていずれは夫ってことだよね？

二人共仲がいいな～。

「俺は静かに1人で寝たいんだが？」

あからさまに『1人で』の部分を強調する雄二。

素直じゃないよな～

「雄二も素直になりなよ。霧島さんみたいに綺麗な人に膝枕してもらえるんだよ？僕だったらすぐにしてもら…」

ボコッ！

「ゴハッ！？」

な、なんだ！？急に頭に衝撃が！？

床には僕に当たった衝撃でへコんでいるアルミ缶。

「ボクね、結構こういうのには自信あるんだ～」

そして缶が飛んできた方向には、笑って次の缶を投げようとする工藤さん。

顔は笑っているけど目が笑っていない。
ってあれまだ未開封！？
それって危なくない！？

「ちょ、ストップ工藤さん！危ないよ！？それ危ないから！」
「だって吉井君が……」
「ぼ、僕……？僕、何かした？」
「あ～、明久。今のはお前が悪いぞ？」
「え？な、なんで？」
「……吉井は鈍感」
「そ、そうなの？」
やっぱり僕の頭じゃ追いついていけないよ……
トントン
ショートしかけの僕の肩が叩かれる。

「ん？どうしたの、秀吉？」

「あ、明久は今から寝るんじゃろ？」

「ああ、そうだった。早くしないと昼休みが終わっちゃうよ」

「ちょ、まだ話は終わっとらんのじゃ！」

「え？」

ソファーに足を向けた僕を引き止める秀吉。

どうしたのかな？

「そ、その……もし明久がよければわしが……」

「秀吉が？」

「ひひひ、膝枕を……」

「膝枕を？」

「し、してやるのじゃ／／／」

ほぅ……秀吉の膝枕ね……

「丁重に断らせてもらいます」
「な、何故じゃ！？」
「いや、だって冗談でしょ？」
「冗談ではないのじゃ！」
「でもなんだか美味すぎる話だし……」
「何故にこういう時だけそう深く考えるのじゃ！？」
今のって遠回しに『いつもは単純』って言ってるよね？
「だって秀吉にメリットないじゃん？」
「そ、それは……い、いつものお礼なのじゃ！」
「お礼？」
「そうじゃ！いつも明久にはよくしてもらっておるからこれは日頃のお礼なのじゃ」
「ま、まぁそういうことならせっかくだししてもらおうかな」
「その話待った！」

なんだか今日、待った多くない？

「く、工藤っ！な、なんじゃ？」

「何じゃないよ。秀吉だけズルいよ。ボクも吉井君の膝枕したいよ」

「工藤さん！？君は急に何を言ってるの！？」

「ダメじゃ！こればっかりは譲れんのじゃ！」

「いいじゃん！秀吉は同じクラスなんだしこういうときくらい譲ってよ！」

「あ、あの……2人共……？」

「「吉井君（明久）は黙っててて（おるのじゃ）！！」」

「はい……」

何でだろう？

僕の話のはずなのに僕が蚊帳の外だ……

昼寝でもしようかな（後書き）

オリジナル小説も書いていますので、是非読んでみてください！

後、オリ話で書いてほしいこと、募集します！

予定としては、秀吉と愛子との買い物デートの後、修学旅行でも書こうと思っていますので、その間か終わった後に書こうと思います！

ジャンケンポン！

「ボクが膝枕するのっ！」

「違うのじゃ！わしじゃ！」

「何を言ってるのよ！二人ともダメよ！」

「そうです！そういうことはよくないと思います！」

未だ言い合う女子四人。

これって僕に関する話だよね？

「ねえムッツリーニ、僕はまだ寝れないのかな？」

「……それは俺にも分からない」

「もう寝たいんだけど……」

「……寝たいなら寝るといい。女子には話が終わった後に話しておいてやる」

「ありがと、ムッツリーニ」

軽くお礼を言ってソファーに向かう。

見ると雄二は霧島さんに膝枕されて既に寝ていた。

結局膝枕してもらってるじゃん……

というか周りの男子が物凄く睨みつけてるし……

後で雄二に刺されないように気をつけてって言わなくちゃ。

ふぁ……

早く寝よ……

僕はソファーに倒れこみ、そのまま深い眠りについた。

一方女子ーー

「もうっ！こういう時くらい譲ってよ！」

「嫌じゃ！絶対に譲らないのじゃ！」

「あんたたちは勝手なこと言わないの！」

「そうですよ！膝枕なんてダメです！」

相変わらず水掛け論を行っていた。

すると、

「うるさいわね。さっきから何を言ってるののよ」

教室の奥から勉強していた優子が出てきた。

「……誰が明久に膝枕するかで喧嘩中」

そして事情をムッツリーニが説明。

「よ、吉井君に膝枕！？ダメよそんなこと！」

「優子まで！いいじゃん別に！」

「よくないわよ！絶対にダメなんだから！」

「ほら！木下さんだってこう言ってます！二人とも諦めてください！」

「「嫌だよ（じゃ）！！」」

「じゃ、じゃああたしだって膝枕したいっ！」

「木下さん！？」

「ううっ……姉上まで……で、でもいくら姉上でも譲らんのじゃ！」

「あんたは引っ込んでなさい秀吉！いつも吉井君といるじゃない！」

「そんなの関係ないのじゃ！今回はわしが最初に言ったからわしが膝枕するのじゃ！」

「ダメだよ！秀吉ばっかりズルいもん！」

「そうよ秀吉！」

「嫌じゃ！絶対嫌なのじゃ！」

「分かった。じゃあジャンケンで決めようよ。一回勝負の恨みっこなしで！」

「むぅ……仕方ないのじゃ……」

「しょうがないわね……それで手を打とうじゃない……」

「な、ならウチだって参加するわ！」

「私もです！」

「……最初からそうすればよかった」

やれやれと首を振るムッツリーニ。

因みに明久がすでに寝たことをムッツリーニはまだ言ってないので女子五人は未だそのことを知らない。

「最初はグー！ジャンケン！」

「「「「「「ポン！！」」」」」」

秀吉→パー

愛子→グー

優子→パー

美波→グー

姫路→グー

「「やったぁーー！！」」

「ま、負けたぁ……」

「そんなぁ……」

「悔しいです……」

負けて自分の拳を見つめる愛子とうなだれる美波と姫路。

そして残ったのは木下姉妹。

「今回は姉上とて手加減はせんのじゃ！」

「秀吉になんて負けたくないわ！」

「「最初はグー！ジャンケン、ポン！」」

秀吉→チョキ

優子→チョキ

「むむっ、流石は姉上なのじゃ……」

「あんたもやるじゃない、秀吉」

「「あいこでしょ！」」

秀吉→パー
優子→グー

「や、やったのじゃぁぁーー！！」

「ひ、秀吉に負けた……」

「……勝った秀吉にお知らせ。明久はもう寝た」

「な、何じゃと！？」

ムッツリーニに言われ、明久がいた方を見るが、そこには明久の姿はなく、Aクラスのソファーでぐっすりと眠っていた。

「む～！いいのじゃ！無理矢理でも膝枕するのじゃ！」

怒りながら明久のところへ向かうと、明久の頭を持ち上げ、自分がソファーに座り、明久の頭を膝に置く。

「ん……」

明久は頭を動かされ、少しだけ吐息を漏らすと、再び夢の中へ。

一方でムッツリーニはジャンケンで負けた四人に近づき、何枚か写真を取り出す。

「……明久の寝顔写真。一枚五百円」

「「「「買ったぁぁーー！！」」」」

「……毎度あり」

元気をすぐに取り戻し、明久の写真を買う四人であった。

ジャンケンポン！（後書き）

感想お待ちしております！

アキちゃんの写真（ｗｉｔｈパンチラ☆）

キーンコーンカーンコーン

んん……

予鈴のチャイムだ……

起きなきゃ……

ってあれ……？なんだか頭の下がソファーとは違った柔らかさに……？

僕がゆっくりと目を開けるとーー

「お、おはようなのじゃ明久／／／」

「ひ、秀吉！？何時の間に！？」

起きてびっくり、目の前には頬をほんのりと染めた秀吉の顔。

よく確認してみると、どうやら僕は膝枕をされているようだ。

慌てて飛び起き、秀吉から離れる。

「ど、どうして秀吉が！？」

「ジャンケンで勝ったからわしが膝枕をしていただけじゃ」

「そ、そうなんだ……」

「迷惑……だったのかの……？」

「え？いやいや！そういうわけじゃないんだよ！」

まあ、周りの男子からの殺気が物凄いことになっているのは気になるけど……

「あ！吉井君起きたんだ！」

後ろに写真らしき物を隠してこちらに近づいてくる工藤さん。

……あの写真、なんだか不吉なものを感じる……

「工藤さん、その後ろに持ってる写真、見せてくれない？」

「え！？だ、ダメだよ！」

「う～ん……そうかぁ……」

「工藤、明久が手を繋いでくれるそうだ。な、明久」

何やら話に入ってきた雄二。
こういう時の雄二は助けてくれることが多いからな。
話を合わせよう。

「う、うん。だから手を出して？」
「うんっ！」

パッと手を出す工藤さん。
素直だなあ～
差し出された手に握られている写真をヒョイと取る。

「ああっ！しまった！」
「何が写ってるのかな？」

一枚目はと……僕の寝顔？
二枚目は……僕の女装？

三枚目……僕の女装（ｗｉｔｈパンチラ☆）

トランクスだからセーフ……

なんか前にもこういうのあったよな……

ん、まだある。

四枚目……猫耳つけて寝ている女装姿の僕……（もちろんｗｉｔｈパンチラ☆）

「……（ダッ！）」

「明久！？どこに行くんだ！？」

「止めないで雄二！僕はもう男として大切な何かを失ったんだ！！」

「落ち着け！ここは三階だぞ！飛び降りようとするんじゃねぇ！」

というかあんな写真何時の間に撮ったんだ！？

「く、工藤！お前の持っていた写真はどんなのなんだ！？」

「ええっと、確か最後はムッツリーニ君が吉井君が寝ている間に着せて撮った限定版アキちゃんの猫耳寝姿写真だったと……」

「ムッツリーニいいいーーー！！！！」

くそっ！ムッツリーニめ！この恨み、必ず晴らす！

「そういえば工藤ってそんなに騙されやすいキャラだったか？なんかこう、意外と騙されにくいキャラだったような気がするんだが？」

「……恋は盲目という」

「なんだか意味が違う気もするが……明久に関わるとキャラが変わるんだな」

放課後のピンチ

「はぁ……とりあえずこの写真は処分するからね」

「ええっ！？ダメだよ！手も繋いでないのに写真を処分するなんて！」

「いや、手は繋がなくてもいいでしょ……」

「じゃあ体を一つに繋げる？」

「いえ、遠慮しておきます……」

「え～？どうして？」

「そんなことを女の子が言っちゃダメだよ」

「本音は？」

「工藤さんの後ろに阿修羅像が四体いるから」

「ふぇ？」

工藤さんが振り向くとそこにはドス黒いオーラを出した秀吉、美波、姫路さん、木下さんがいた。

「や、やあ……四人ともどうしたの？」

冷や汗を流しながらも冷静さを装う工藤さん。

「工藤よ、明久と体を一つに繋げるとはどういう意味じゃ……？」

「工藤さん？抜け駆けはイケマセンヨ？」

「ちょ～っとＯＨＡＮＡＳＩがあるんだけど？」

「久々に腕が鳴るわね～（パキポキ）」

「あ、あはは～。皆何を言ってるのさ。ボクはただ吉井君に保健体育の実技の指導をしようと……」

あ、地雷踏んだ。

「「「「愛子（ちゃん）（工藤）！！！！」」」」

「ウワァァァーー！！！」

全力で逃げていく工藤さん。

あんなキャラじゃなかったよね？

「さて明久、そろそろ教室に戻るぞ」

「う、うん。そうだね」

僕は追いかけっこをする女子五人を後にＡクラスを出て行くのだった。

☆★☆★☆★☆★☆

「ん〜〜〜！！やっと終わった〜〜〜！！」

午後の授業も全て終了し、皆帰宅しはじめる。

「よっしゃ明久！ハンバーガー奢ってもらうぞ！」

「……お腹空いた」

「分かってるって。それじゃ、行こっか。ってあれ？」

「ん？どうした明久？」

「ごめん雄二、どうも昼休みのときに財布をＡクラスに起き忘れちゃったみたい」

「何をやってるんだ……」

「今から取りに行くから雄二たちは昇降口で待ってて」

「ああ、出来るだけ早く来いよ」

「うん」

僕は走ってＡクラスへと向かった。

Aクラスに入ろうとするとそこからちょうど木下さんが出てきた。

「よ、吉井君！？どうしたの！？」

「どうも昼休みに財布を忘れちゃったみたいで……取りに来たんだ」

「ああ、そういうことね」

「それにしても、まだ教室にいたんだ」

「ええ、ちょっと自習をね」

僕たちFクラスは補習というものがあるため、いつも帰りが他のクラスよりも遅いのだ。
それにしても、やっぱり木下さんは勉強熱心だな～

「あ、じゃあ他にも誰か教室に残ってるの？」

「ええっと……確か愛子がソファーで寝てたと思うわ。どうも昼休みに私たちから逃げて疲れちゃったみたい」

「そうなんだ。他には？」

「他には……居なかったと思うわ」

「そっか……じゃあ教室の鍵はどうしたらいいかな？」

「そうね、愛子が起きなければそのままでいいわ」

「分かったよ。ありがとね、木下さん」

木下さんに一言お礼を言い、僕はＡクラスに入った。

早く財布を取って雄二たちのところに行かなきゃ。

……どうしよう、この状況……

財布を取ろうと入った僕は、すぐに財布を見つけ出すことが出来た。

ただ、一つだけ問題があるんだよね……

僕の財布の上で、工藤さんが寝いるんだ……

僕がいつも財布につけているストラップが見えてるからそこにある

んだろうけど、こんな状況じゃ取ることなんてできない。
ちょっとかわいそうだけど工藤さんに起きてもらおうかな……？
でも工藤さんは疲れてるって言ってたしなぁ……
それにしても……
いつもは活発でボーイッシュな工藤さんだけど、寝顔をみるとやっぱり可愛い。
って、僕は何を考えているんだ……
早いところ財布を取らないと。
そう思ってとりあえずソファーに一歩近づいた瞬間ーー

「おわっ！？」

手前にあった机に引っかかり、倒れる僕。
って！このままじゃ工藤さんにぶつかるじゃん！
慌てて軌道修正を行い、何とかギリギリぶつからずに済んだ。
……ただし、工藤さんの横に寝転ぶ形になっちゃったけど……
くそっ！？なんでこのソファーはこんなに広いんだ！？普通は二人

も寝転ぶスペースないでしょ！？

まあ、とりあえず今はそんなことより早く退かないと。

急いでソファーから降りようとすると、

ギュッ

「……！？／／／」

寝ぼけた工藤さんが僕に抱きついてきたのだ。

何この羞恥プレイは！？

というかこれじゃあ抜け出せなくなったじゃないか！

脱出するにも出来ない状態となり、焦る僕。

ヤバイ……！顔が近すぎる！？

目の前には工藤さんの顔。

一歩間違えればキスでもしてしまいそうな距離だ。

どどど、どうしよう！？

『襲っちまえよ』

くっ！こんな時に出てくるな僕の悪魔め！

『こんなチャンス滅多にないせ？』

黙れ！人にはしてもいいことと悪いことがあるんだ！

『覗きをしようとしたことがあるのはどこのどいつだ？』

そ、それとこれとは別だ！

『ったく、ビビりだな～』

う、うるさいっ！

頭の中で悪魔と喧嘩していると、モゾモゾと動き出す工藤さん。

もしかして起きちゃった！？

かなり焦った僕であったが、工藤さんは起きたのではなかった。

しかも、いいのか悪いのか、僕の胸に顔を埋める形となったので、先ほどよりもマシ（？）になった。

でも、解決にはなってなくない……？

早く脱出しないと……

放課後のピンチ（後書き）

感想お待ちしております！

ＢＧＭは禁じられた遊び～ＳＯＳ～☆

どうも、吉井明久です。

現在僕はとんでもない状況に。

何故か寝ている工藤さんが僕に抱きついて顔を僕の胸に埋めている。

頭の中で流れるＢＧＭは禁じられた遊び。

さて、どう脱出しようか……？

「吉井君……」

「お、起きてる！？」

「吉井君……もうダメ……そこだけはっ……！」

「なんだ寝言か……って一体どんな夢を見たら今のセリフが出てくるんだろ……」

それにしても工藤さん、気持ち良さそうにしてるな～。

ほんと、男子から人気があるだけあってやっぱり可愛いよね。

……ヤバい……そんなこと考えたら余計にドキドキしてきちゃったよ……

でも早く抜け出すにもしっかり抱きつかれてるし、ここで工藤さんを起こしちゃったら社会的にも肉体的にも殺されちゃうよなぁ……

時間は刻一刻と過ぎるばかり。

どうしたものかと悩んでいると、

「ふぁ～……」

ヤバい！工藤さん今度こそ起きちゃったの！？

「……？」

何かに抱きついているのに気がついたらしく、顔を上げる。

もちろん僕と目が合い……

「や、やあ工藤さん……」

工藤さんの顔はみるみる内に真っ赤になっていって、

「キャアァァァーーー！！！！」

「ブベラッ！！」

僕は物凄い勢いで蹴飛ばされた。

あぁ……走馬灯が見えるよ……

☆★☆★☆★☆★☆

「すいませんでしたぁぁーー！！」

工藤さんの前で全力で土下座する僕。

うん、日本人には土下座という素晴らしい謝り方があるね。

「こ、こちらこそゴメンね。ボクの方から抱きついちゃったみたいだし……／／／」

「ううん。元はと言えば僕が財布を忘れちゃったのがいけないんだし」

「あ、あのさ……一つ、聞いてもいいカナ？」

「うん。いいよ」

「そ、その……ボクに抱きつかれて嫌じゃなかった？」

「え？いやいや！そんなことないよ！工藤さんは可愛いし、寧ろその、ドキドキしたというか……」

何を言ってるんだ僕は！？

これじゃあただの変態じゃないか！

「そ、そうなんだ……／／／」

なのになんでだろう？

工藤さんの顔が赤いのは？

ガラッ

「おい明久。まだ見つからないのか？」

中々こない僕を探しにきたらしい雄二が教室の扉を開けた。

そしてしばらく固まる雄二を見て、僕は気づいた。

今の状況は

・顔を真っ赤にして俯く工藤さん。

・同じく顔が赤いであろう僕。

・お互いに向き合っている。

・二人きり。

・放課後の教室。

うん、条件が揃いすぎてるね。

どう考えも告白の場面としか考えようがない。

僕でもこの状況を見ればそう思うだろう。

どうやら、というか、当然のごとくそう判断した雄二は、

「あ～……すまん。なんか空気ブチ壊したか……？俺はもう帰る

から、楽しくやってくれ」

そう言い残し、教室を出て行った。

「雄二待ったぁぁーー！！！」

僕の叫びも虚しく、雄二には届かなかったらしい。

ここは出来るだけ早く追いかけないと！

そう思って、財布をポケットに突っ込み、追いかけ……ようとしたのだが、

「あ、よ、吉井君！」

「どうしたの？工藤さん？」

「あのさ、で、出来れば一緒に帰らない？」

「あ～……でも雄二を追いかけないと……」

早く誤解を解かなければと思ったのだが、そこまで言うと、工藤さんの顔が一瞬寂しそうな表情になった。

チラッと時計を見るともう六時。

……仕方ない。

「やっぱり、何でもないや。いいよ、一緒に帰ろっか」

「え！いいの！？」

「うん。もう6時だし、女の子を1人で帰らせるわけにはいかないしね」

実際、そう思ったのは事実だ。

雄二の誤解を解くのは後でいいし、とりあえずは工藤さんの頼みを聞くことにしよう。

「それじゃ、行こっか」

「うんっ！」

その瞬間、工藤さんはとても嬉しそうな表情を見せてくれた。

ＢＧＭは禁じられた遊び～ＳＯＳ～☆（後書き）

感想をお待ちしております！

清涼祭の不幸再び（前書き）

今回は急展開でちょいシリアスにしました！

清涼祭の不幸再び

僕は工藤さんと帰るため、昇降口で靴に履き替えていたのだがーー

「ああ、工藤さん、いたいた」

「赤星先輩？どうしたんですか？」

1人の女の人が手を振りながらこちらへとやってきた。

工藤さんが先輩と言っているってことは三年生なのだろう。

「実はね、急遽、水泳部で緊急ミーティングを行うことになったの。だから、集まってもらえる？」

「え？ああ、はい。分かりました……」

緊急ミーティングかぁ……

ってことは帰りはどうするのかな？

「ゴメンね吉井君。そういうことだから、先に帰ってて」

「あ、う、うん……」

残念だなぁ……

まあ、仕方ないことなんだろうけど……

「じゃね、また明日」

「うん。また明日ね」

こうして僕は工藤さんと別れたのだった。

愛子ｓｉｄｅ

「それにしても赤星先輩。緊急ミーティングなんてどうしたんですか？」

吉井君と帰れなくなったのは残念だが、部活の方も大事なので仕方がない。
でも先輩はもう引退したはずだし、ミーティングってどういうことだろ？

「あなたたち、まだ部長が決まってないわよね？」

「あ、はい。でも先生がこれからゆっくりと決めていくって……」

「そうだったんだけど、急ぎで部長を決めなくちゃいけなくなったの。それで先生はまだ用事があるらしいから、先生が私に部長決めを仕切ってくれって」

「ああ、そういうことだったんですか」

赤星先輩は元部長だし、そういう事情なら納得できる。

ボクは赤星先輩と共に水泳部の部室へ。
そして、部室の扉を開けた瞬間ーー
ドンッ！
「きゃ！？」
後ろからいきなり蹴られて部室に押し込まれた。
その押し込まれた部室にはなんとーー
「ゆ、優子に秀吉！？」
縄で体を縛られ、ガムテープで口を塞がれていた優子と秀吉がいた。
「赤星先輩！？これどういうことですか！？」
「見て分からないの？こういうことよ！」
そういうと先輩はボクに蹴りを入れる。

「グハッ！？」

あまりの痛さに倒れるボク。

「ほんっとに単純ね。バカみたい」

「ど、どうしてこんなことを……？」

「どうして？嫉妬よ嫉妬。目障りなのよあんたたちは。吉井君に引っ付き回って邪魔なの」

……と、いうことは赤星先輩も吉井君のことを……？

「それにもう一つ理由があるわ」

「もう一つの理由……？」

「みんな、入ってきていいわよ」

赤星先輩がそういうと、部室の扉が開き、ゾロゾロと沢山の人が入ってくる。

ざっとみて２０人ほど。全員男だ。

中にはいつぞやの変態先輩（とこなつ）たちもいる。

「調子に乗ってるあなたたちに先輩として礼儀ってものを教えてあげる。みんな、好きにしていいわよ？その代わり、約束は忘れないでね？」

「ああ、今度吉井を捕まえればいいんだろ？」

「そうよ。そこを私が助ければ完璧。まあとりあえずはこの子たちを好きにしていいわ」

「マジかよ……みんな可愛いじゃねえか……」

「こんな子たちと童貞卒業か？夢みたいだ……」

ど、童貞卒業……？

ってことはボクたち犯される！？

「ハァハァ……木下秀吉……お前を好きに出来るとは思ってもみなかったぜ……」

「ち、近寄るでない変態！気持ち悪いのじゃ！」

「だがお前は縛られてるんだぜ？もう俺のもんだ」

「い、嫌じゃ！離れるのじゃ！お主なんか好かんのじゃ！」

秀吉は変態先輩相手に必死の抵抗をしている。

「やべえ……興奮してきたぜ……あの有名な木下姉妹の姉だろ……？やっぱレベル高えな……」

「いや、こっちの工藤ってやつも中々だぜ？しかもエロいらしいし……」

「ち、近寄らないでよ変態！」

「や、やめてよ！」

「へっ、そんな抵抗したって無駄だぜ？」

荒い息遣いでらこちらへと近づいてくる先輩たち。

このままじゃ、本当にヤられる！

「うひょ～。スベスベじゃねえかよ……久々に女の子に触ったよ……」

ガシッと腕を掴んでくる先輩。

優子や秀吉も状況は一緒だった。

「さて、そろそろヤリますか……！」

そういって、ボクの胸に近づいてくる先輩の手。

だ、誰助けて！

バンッ！！

「「「……！？」」」

願いが通じたのか、そこから現れた三つの影。

「よ、吉井君に坂本君！？それにムッツリーニ君まで！」

「ど、どうして！？鍵をちゃんと閉めてたはずなのに！？」

「すみませんね、先輩。こっちには天才（ムッツリーニ）がいるんで」

「……これくらいの鍵、十秒で開けれる」

「これまた随分と乱暴な真似してくるれてんじゃねえかよ？」

「とりあえず、そこの三人を開放してもらいましょうか？赤星先輩」

「それと変態（つねむら）、秀吉からすぐに離れろ。気持ち悪くて吐き気がする」

「なんだと！？テメエら喧嘩売ってんのか！？」

「ええ、売ってますよ？あんたら屑どもにね！」

「ったく、こんなところに連れ込んで襲うなんて、お盛んなことだな？だが、残念なことにこっちには王子様がいるもんで、悪いがあんたらをぶっ潰させてもらうぜ！」

「……覚悟！！」

「んだと！？こっちは２０人もいるんだ！みんな、かかれ！」

先輩はボクたちから離れ、吉井君たちに襲いかかった。

清涼祭の不幸再び（後書き）

感想お待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4851x/

明久がハーレムで頑張りますっ！

2011年10月19日03時12分発行